

(1) 神岡軌道神通川橋梁全景。

竣工せる神岡軌道神通川橋梁

本橋は神岡軌道が富山縣婦負郡細入村と上新川郡下タ村の間、神通川本流を横切るところに架設された橋梁である。神岡軌道は主として神岡鐵山の製品を運搬してゐる軌道で、從來船津より飛越線笹津驛まで運轉してゐたが、飛越線の延長に伴つて同線猪谷驛に連絡することとなり、架橋の必要に迫られた譯である。

本橋は五つの徑間を有するカンテイルバー橋で中央徑間72米、側徑間36米二連、45米、42米各一連及び徑間12米のプレートガーダー五連よりなり總長294米、水面より高さ180餘尺である。荷重は8噸カソリン機關車を通ずるよう設計せられた。

基礎は何れの橋脚部分も硬質の岩盤で橋梁基礎として申分なく、多少の掘鑿を要した外特殊の工法を必要としなかつた。

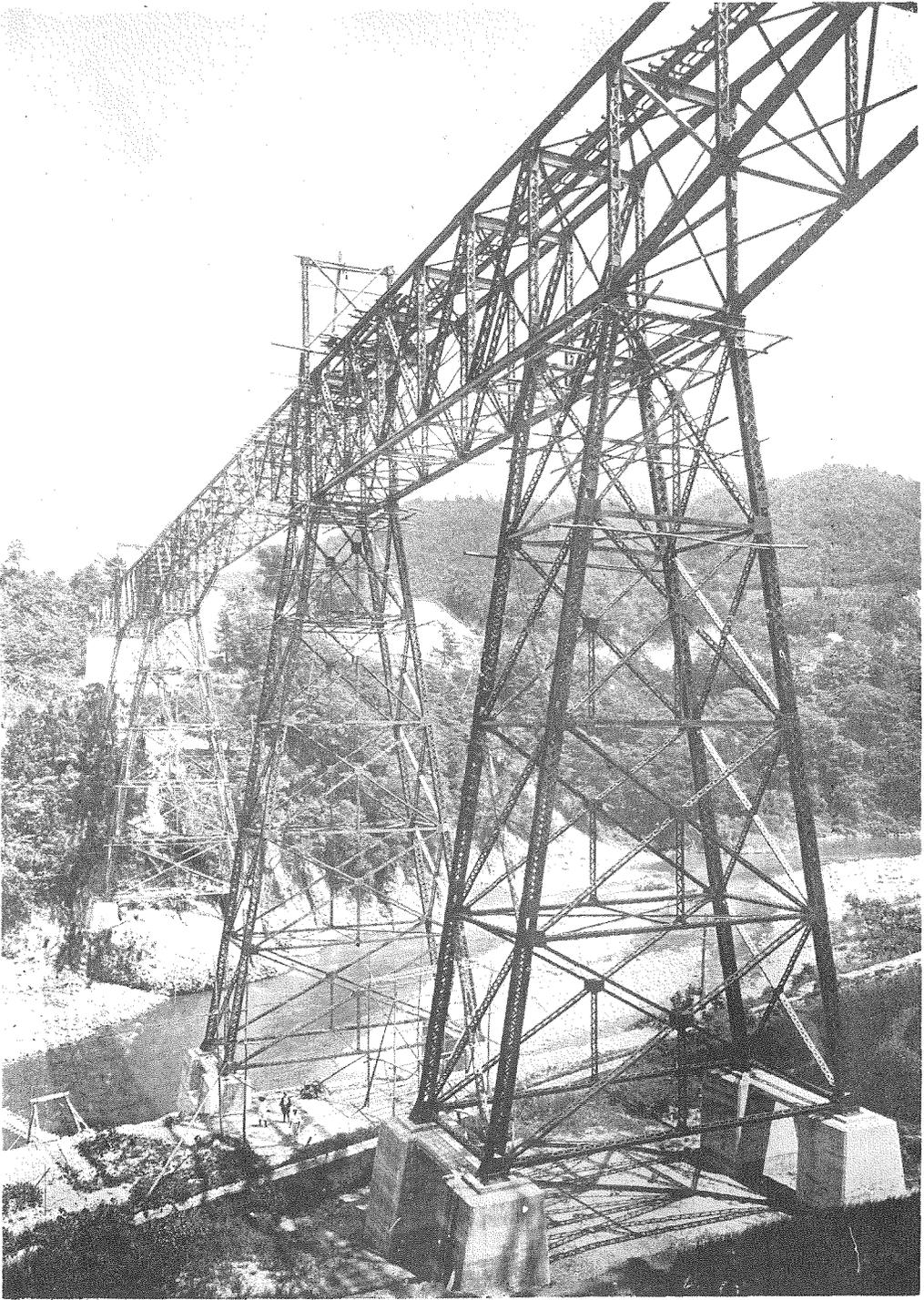
本橋架設計畫にあつて、如何なる型式をとるべきかと云ふことは研究を要した問題であつた。

最初はサスペンション式に依ることも考えられたが Rigidity 等の點から見て軌道橋としては不向と思ひ、カンテイルバー式を採用したわけである。

本橋は鐵部工事に限り、其實施設計と製作とを數個所のメーカーから募つたが、その結果合資會社東京鐵骨橋梁製作所の設計を採用することとなり、昭和五年末同所に發註、本年五月工場に於ける製作を了し、直ちに現場の組立にかゝつたが、折悪しく梅雨に會し七月滿一ヶ月は工事を進めることが出来なかつた。八月にはいつか再び續工、去八月二十五日完成し、同二十七日開通試運轉を行つた。此處に示した寫眞は完成間際の八月十九日に撮影したものである。高さに於ては珍らしい橋と云へよう。

本工事に要した鋼材は總量550噸、工費は基礎共で約15萬圓である。尙主要工事關係者は、基礎工事が株式会社飛鳥組、設計及製作は合資會社東京鐵骨橋梁製作所、組立及架設は清水組であつた。

神岡水電株式会社技師 工學士 原 田 信 作



(2) 神岡軌道神通川橋梁
側面仰觀。

(8) 神岡軌道神通川橋梁一般圖

